

「動物農場」★★★★

2009（平成21）年1月3日鑑賞<テアトル梅田>

監督・脚本：ジョン・ハラス、ジョイ・バチュラー
原作：ジョージ・オーウェル『動物農場』（角川文庫刊）
ナレーター／ゴードン・ヒース
動物の声／モーリス・デナム
1954年・イギリス映画・74分
配給／三鷹の森ジブリ美術館

<オーウェルは『1984年』以前にこんな作品を！>

イギリスの作家ジョージ・オーウェルが1949年に発表した『1984年』は、スターリン体制下のソ連を連想させる全体主義国家体制に警鐘を鳴らした問題小説。そのオーウェルには、1945年に発表しベストセラーとなったこんな問題作もあった！それが今回アニメ映画で観た「永遠不変の権力の寓話」と称されている、1954年に製作された『動物農場』。

何回か観た予告編では、強欲な農場主であるジョーンズ氏を追放し、「すべての動物は平等である」と宣言して動物達による農場経営を目指す姿に興味を覚えたが、アニメがあまり好きではない私としては少し敬遠気味だった。しかし、正月休み中なら鑑賞可能となったため出かけに行ったが、充実した74分間を過ごすことに。小中学生の学習素材としてはもとより、『蟹工船』ブームの中「派遣切り」された若者たちの暴動が危惧されている(?) 昨今、広く若者たちの教材としなくては・・・。

ところで、イギリス人作家がなぜソ連の共産主義を批判する小説を? それは、彼が1930年代にスペイン内戦に共和国側の民兵として参加した時に、ソ連本国における粛清の影響をモロに受けた体験から。つまり、ファシズムと戦っていたはずの自分たち民兵組織が、スターリンから「トロツキー主義者」と批判され、えらい目にあったというわけだ。なるほど、なるほど・・・。

<3匹の有能な豚比較>

革命にはリーダーが必要。またリーダーには理論家と実践派が必要。他方、革命闘争の中でリーダーたちの内部対立と抗争が必然的に起きることは過去の歴史が証明している。この映画に最初に登場する革命のリーダーは死の直前に全動物を集め、「決起せよ!」と演説したメジャー爺さん。まあ話を単純化すれば、彼のモデルはレーニン。ホントはソ連の社会主義革命で最も重要な人物はこのレーニンだが、『動物農場』では話を単純化するため、その後にリーダーとして登場するスノーボールとナポレオンという2匹の豚に焦点をあてている。

ジョーンズ氏の追放後最初のリーダーとなったスノーボールは、「すべての動物は平等である」「動物は動物を殺してはならない」「動物はベッドの上で眠ってはならない」などの原則を宣言(いわば憲法を制定)した。そして、農場の生産性を上げるため大阪府の橋下徹知事と同じように教育に重点を置くとともに、風車小屋の建設を進めようとしたが、権力欲の強いナポレオンによって追放されることに。ナポレオンはスノーボールを革命の裏切り者だと断定し、彼の書いた設計図をもとに風車建設計画に乗り掛かったが、彼がスノーボールを追放したのは一体何のため?

ここまで書けば、団塊世代の皆さんはすぐにスノーボールはトロツキー、ナポレオンはスターリンがモデルだと気づくはずだが、『蟹工船』しか読んでいない若者にはわからないだろう。日本で若者たちによる新たな「変革」や「革命」を考えるについては、若者たちは帝政ロシアを打ち倒したロシア革命の歴史とソ連邦形成の歴史くらいはしっかり勉強しなければ・・・。

<なぜ権力は腐敗するの?>

日本では昨今霞が関支配、官僚支配の打破を焦点とする政権交代が実現するかどうか最大のテーマだが、2009年10月1日に建国60周年を迎える中国でも共産党の一元支配の中、党幹部や政府高官の不正・汚職はひどいようだ。ソ連のスターリン時代の権力闘争や中国の毛沢東時代の権力闘争のような露骨な権力闘争は今のところ収まっているが、民主主義国家ではなく一党独裁国家ではいつそれが復活してもおかしくない。

それにしても、なぜ権力は腐敗するの? それは、ナポレオンの農場経営の手法を見ればよくわかる。その特徴は、第1に側近の豚スクイーラーを起用した言葉巧みな宣伝、第2に訓練した大型犬を強力な憲兵役とした恐怖心の植えつけ。そんな権力志向派のナポレオンと対置される勤勉な働き者の代表が雄馬のボクサーとその友人であるロバのベンジャミン。彼らの献身的な労働がなければ農場の命運をかけた大規模公共事業である風車の完成もなかったはずだ。

風車の完成によって飛躍的に動物農場の生産性は向上したはずだが、それにとまなうナポレオン政権のさらなる腐敗とは?

<欲望は際限なし?>

ナポレオンは最初から「すべての動物は平等」等をはじめとする動物農場の憲法に反対だったの? いやいや、そうではないはず。この映画後半に見せるナポレオンの変貌ぶりはすごいが、それはきつと彼の人間性のなせるワザ。際限のない欲望を持ったタイプの豚が権力を握った時の恐さがヒシヒシと身に沁みてくる。

ナポレオンが動物農場の自主自営形態から脱皮し、人間との直接取引に乗り出したのは大改革。いわば、鎖国を続けていた日本国=徳川幕府が開国し、貿易立国宣言をしたようなものだ。しかし、人間との取引によって現金が手に入るようになると、家が欲しくなり、家具が欲しくなり、酒が欲しくなるもの。もちろん、そんな実態を他の動物たちに見せることはタブーだから、言論統制による監視体制が不可欠だ。

サブプライムローンの破綻を契機としてアメリカ型の金融工学がいかにかインチキであったかという議論が突如盛んになっているが、1954年製作のこの映画ではそこまでは到達しておらず、せいぜい商品取引による富の独占が問題。しかしこの映画を観ていると、人間も豚も欲望には際限がないことがよくわかる。

<こう簡単に憲法が改正されては・・・>

長年日本国では憲法改正の議論はタブー視されてきたが、近年は改正議論が盛んになってきた。私は現行憲法の歴史的意義や価値は十分認めるものの、何十年も同じでいいわけがないのは当然と考えている。もちろんその改正には慎重な国民的議論が必要だが、この映画を観ているとそれがあまりにも容易に。

つまり、反乱を起こしかけた鳥たちの処罰をめぐって、いとも簡単に、「動物は動物を殺してはならない」というシンプルだった条文が、「理由なく殺してはならない」と改正されることになったわけだ。そのココロは、つまり理由がある場合殺しはオーケーということ。また、「すべての動物は平等である」という憲法の第1原則も、「しかし、ある動物はもっと平等である」と改正されることに。こう簡単に憲法が改正されては・・・。

<独裁権力はいつか崩壊・・・>

今や北朝鮮の金正日独裁政権がいつ崩壊するかが全世界から注目されているが、ナポレオンを頂点とした豚支配はインターナショナルになろうとしていた。つまり、それは豚支配の農場外輸出。つまり、あちこちの農場で豚支配が現実化しようとしていた。そして、今日はナポレオンの主催による国際会議の日。クソ糞沢な食品と上等のワインを味わいながら、豚たちは自分たちの天下到来と氣勢をあげていたが、その会場の外は今やナポレオンたちのインチキをはっきりと見抜いたベンジャミンをリーダーとする革命軍たちが取り巻いていた。

ナポレオン体制はこれによってきつと崩壊するだろうし、北朝鮮の金正日体制も近いうちに崩壊するだろうが、問題はその後登場する政府。さて、ナポレオン政権を倒した後の動物農場の新権力者と新体制は? 2009年秋までに自公連立政権が崩壊することはほぼ確実。1月5日朝刊には渡辺喜美元行革担当大臣の自民党の離党が確実と報じられたが、これはその第一歩。そこで問題は、自公連立政権崩壊後の民主党を中心とした新体制のあり方と、現実には何ができるのかということ。そんな現実論を考えながらこの映画を観れば、より面白くなるのでは?